

對立する二人の學者

柴 田 末 治

(一)

我國の或官立大學の經濟學部では極く最近まで經濟原論の講義を擔當する二教授があつた。そしてこれら二教授は一年毎に交代して經濟原論の講座を擔任する事になつて居た。同じ大學で同じ様に經濟原論の講義をするのであるから、定めし同じ様な講義振りであらうと想像する人があるかも知れないが、不思議なところにはこれら二教授の説く所が天地或は白と黒ほゞ異なるのである。だから或學生がA教授の試験を受けるのに若しB教授に教はつたノートの儘を書きつけて來ようものなら、この學生は必ず落第する。さ同様にB教授の試験を受けてA教授に教はつた學説を是として書き立てゝ見るならば之亦必ず及第點が貰へない。そんな馬鹿げた事があるものかといふかる人があるかも知れないが、右は動かすことゝ出来ない事實なのである。

しからば、こんな風にこれら二教授の講義が異なるのであるか云へば今一々その異點を擧げて居る譯には行かない。さいふのはその異點を述べることには結局二教授の講義をその緒論から最後まで對比して述べることになるからである。つまりこれら二教授の講義のシステムが異なるのであり、このシステムの全部的な相異は結局二教授の説く經濟原論の全範圍を貫く理論に相異あることに由來する。

(二)

今試みにこれら二教授の所説の二三を次に引用する。例へば經濟原論にて講述する最も重要な項目の一つである

『資本』の意義に關してA教授は、『資本は生産の結果たる財にして生産の目的に使用さるゝものを謂ふ。約言すれば生産物にして生産方便たる財を謂ふ』となし、B教授は『資本とは資本主義的組織の下で剩餘の交換價值を生む作用をなすものゝ事である』と教へる。

従つてA教授の説く所によれば石器時代の蒙昧人が木を以て鉤を作りそれを捕魚の用に供するならば鉤は石器時代人にまつて資本なるものであり、石器時代にも既に資本家が存在した事になり、絶海の孤島に於けるロビンソンクルーソーは資本家であつたといふのである。又浮浪者が木の實を打ち落すに杖を以てすればその杖は資本となり浮浪者そのものは資本家となつて三井三菱の同僚たるの名譽を附與さるゝこととなる。

カール、カウツキーに従へば『此等の俗見は單にお伽噺の材料として有益に讀まれる所の平凡なありふれた結果を齎らすに過ぎぬもので諸種の人類社會や其法則や動力なきに關する我々の認識を促進する上には寸毫の效果もない』ものである。

ところが驚くべきことには現在我國に於て所謂經濟學者と稱せらるゝ人達の多くがA教授と大同小異の定義『單にお伽噺の材料として有益に讀まれる所の平凡なありふれた結果を齎らすに過ぎぬ』定義を資本に附して居るのである。

吾々が現代資本主義社會の經濟現象を正しく理解する爲めには『資本は剩餘價值を産む價值』としてB教授の所説の如く解さなくてはならぬ、然るに反之資本の『歴史的範疇』たることを無視して『生産物にして生産方便たる財なり』とする見解は『近世生産方法の特徴を閑却し、それを闇を蔽ひ被せること』なるのだ。が幸に闇は戀の仲立ちである。資本主義の代表者たるものは皆マルクスの資本説についても亦其根柢たる價值説についても敢て知らうと努めないのである。

次にA教授はマルクス學派の剩剩價值説は『不完全にして偏見曲解なり』と斷じ、氏獨特の新剩剩價值説を提唱し社會階級協和論を高唱するに反してB教授は『階級闘争の必然性』と其の必然的轉化』を説述される。

A教授によれば『凡そ財貨の生産は効用を作り出すことを謂ひ……自然、勞働及び資本の三者を生産の要素と謂ひ……生産三要素を適當に結び付ける働を企業と謂ひ、企業をなす人を企業者と謂ふ。凡そ生産には生産費を要すべし、……企業者の私經濟上より言ふ時は其の生産上使用したる三生産要素に對する報酬は即ち彼の生産費なり、土地に對する地代、資本に對する利子、及び其減價鎖却、勞働に對する賃銀等は是なり。此三生産要素が企業者により適當に結び付けられたる時は、生産費を超過する所の剩剩價值を生ずべし。企業者の私人經濟より見れば、剩剩價值は即ち彼の利潤なり。然れども地主資本主又は勞働者の各私人經濟より見れば地代の中にも、利子の中にも、又賃銀の中にも、各々剩剩價值を含むべし。何となれば土地は適當に使用せられたるが爲に、地主が曾て土地に投入したる資本の報酬を越ゆる地代を得べく、勞働は適當に使用せられたるが爲に、勞働の苦痛を償ふて尙餘りある賃銀を得べく、資本は同じく適當に使用せられたる爲に、資本主が心中に豫期せるより以上の利子を得べければなり』

『一般に言へば社會に於ける生産階級換言すれば生産協力者たる地主、資本主、勞働者、企業者の四階級は生産に協力することに由りて、何れも皆剩剩價值を得るなり。土地を貸す人も之を借りる人も共に利益し、資本を提供する人も之を利用する人も共に利益す。勞働を賣る人も之を買ふ人も共に利益す。而して此互に相利益する四階級は必至的に協和合すべきものなり、之を新剩剩價值説及び社會階級協和論の概要とす』と説述する。

之に反してB教授は『剩剩價值の生産』に關して次の如き講義をされる。『資本家的生産の下に於ては最初資本家が生産の爲に放下した價值よりも、より多くの價值が生産の結果として彼の手下に歸つて來るのであるが、このより多き部分の價值は資本家の爲の剩剩價值と稱される。然るにこの剩剩價值は……資本家の賣買する凡ての商品はその價值通りに賣買されるを假定しても、又生産行程に於いて消費される價值は、それが社會的に必要とされる分量である限り

そのまゝ生産物の上に移轉するものであるに拘らず、唯労働力云ふ特殊の商品が自分の持つてゐる價值よりも多くの價值を生む作用をなすが爲に、生れて来るものだ云ふことが分る。今我々が純粹な資本主義の社會を假定するならば、凡ての商品は皆資本家的商品として現れ、その唯一の例外をなすものは労働力であるが、假に凡ての商品がその價值通りに賣買されるとするならば、資本家階級全體から見て、役等の爲に剩餘價值を生むものはこの非資本家的商品たる労働力の供給者としての労働者階級に限られる。だから資本家的生産が純粹に發展すればする程資本家階級の労働者階級の敵對關係は益々著しくなる。そしてその敵對關係は剩餘價值の問題を中心とする。今この關係を明にする爲には資本家が成るべく多くの剩餘價值を獲得する爲に、労働者に對して如何なる方法を探るかを観察する必要がある。

私はこれ以上冗長に亘つて二教授の所説を對比して引用する必要はないであらう。

何となれば讀者は右の資本並に剩餘價值に關する所説のみにつきて見るに二教授の講義に如何に大なる軒輊があり如何に氷炭相容れざる所があるかが看取され従つて又その講義のシステムの全部的差異を推知されるであらうから。

(四)

『如何なる學問も社會或は社會階級の必要から發生するものである』而して現代の社會が資本主義社會であり所謂ブルジョアジーとプロレタリアートの階級對立をその特徴とする社會であることは茲に叙説する迄もない。

然るに『ブルジョアジーは其實踐的必要から出發して彼等の社會科學を創り出した』そして、プロレタリアートも亦その社會科學を必要とする。しからば社會科學の一分科なる前述の經濟學に於いて孰れがブルジョアジーの科學に、そして孰れがプロレタリアートの科學に屬するのであらうか。

A教授の如く資本の歴史的範疇たることを無視し社會に於ける階級對立の事實を否認し隱蔽して社會階級協和論を捏

造し高唱する學者は正に資本の支配を確保し、擴張し、永久化しようとするものであつて現代支配階級たるブルジョアジエの代辯御用學者以外の何者でもない。しかもかゝる御用學者は自分がブルジョアジエの代辯人たることを否認し隠蔽し所謂公正なる第三者の立場をさるゝ稱する。

即ちA教授が常に説く中庸主義並に恩情的社會政策の立場は神聖なる學問彼等の所謂『純粹科學』の代表者たるブルジョア學者の立場である。

しからばブルジョア學者の自稱するかゝる超階級的、超俗世間的な『高い山に鎮座してごたくした市井の生活を虚心に觀察する神』の立場があり得るものであらうか。否な、階級社會に於いてはかゝる立場は決してあり得ない。そこで私は『史的唯物論』に於いて言つて居る輝ける理論家エヌ、ブハリンの言葉を思ひ出さずには居られない。ブハリンは言ふ。

『ブルジョア學者たちは自分等は所謂「純粹科學」の代表者であつて、あらゆる浮世の煩はしさや利害の鬭争や生活苦や利慾や其他の浮世の卑しい事柄には自分等の學問は絶対に關するところがないといつても主張する。彼等は學者といふものは高い山に鎮座してごたくした市井の生活を虚心に觀察する神であるを考へて居る。穢らしい「實際」は純「理論」には少しも影響するものではないを彼等は信じて居る。(いやむしろさう説き立てる)しかし右に述べたところから吾々には之が理窟に合つて居ない事が分る。むしろその逆に科學そのものは實踐から生れるのである。果して然らば社會科學に階級性の存することは全く明かである。如何なる階級も其階級の實踐其特殊な使命、その利害を有し従つて又其階級の物の觀方を持つのである。ブルジョアジエは先づ第一に資本の支配を維持し、永久化し、鞏固ならしめ擴張しようとする。勞働者階級は先づ第一に資本主義的秩序を破壊し勞働者階級の支配を確保して全世界を建て直ほさうとする。ブルジョアは其實踐として一つの事を必要としプロレタリアは其實踐として他の事を必要とする。ブルジョアジエは彼等の物の觀方を持つて居り勞働者階級は又別な觀方を持つて居るので、ブルジョアジエの社會科學はプロレタリア

！トのそれは全く異つて居るさいふことは容易に理解される』云。

(五)

日本の資本主義が發展して、其内在的矛盾を曝露し階級鬭争が脅迫的な姿を以て社會の表面に現はれ來つた今日、社會科學の領域に於ける相對立する學者達の論戰は愈々その熾烈さを加へつゝある。

果して孰れの理論が眞であるかは社會進化の過程に於ける無産階級運動の實踐そのものが證明するであらう。

(終)

(一九二八年三月所謂京大生事件の控訴公判を前にして。)